

生用いくつかの選択コースをだしている。必修コースならば最低限の授業者数は確保できるが、選択コースは完全にお客あつてのコースである。それに教官たるもの、せっかく時間をかけて講義しているのだから、それが学生にアピールした方がいいに決まっている。それで教官はこの採点表とアンケートをかなり真剣に受けている。

各教官が多年の勉強によって得た知識が講義の中の内たる所にちりばめてあり、ピョピョの学生にそれが正しく評価できるかという危惧はあるかも知れない。しかし学生は学生なりに各教官の学問業績についての知識を持っているようである。

2. どう利用するか

こうして採点表とアンケートは教官の授業を改善するのに役に立っていると思う。問題の一つは大学当局がこの学生による採点を大学の運営にどう利用しているかであろう。イリノイ大学では助教授から準教授、準教授から教授への昇進は、各教室の head または chairperson がそれを学部長に推薦することから始まる（わが国と違って、教授や準教授がやめなければ準教授や助教授が昇進しないということはない）。その際には推薦の根拠になる大部の資料を揃えるが、その中に当該教官のこれまでの学生による採点を加えることが義務づけられている。ここが大学当局（学部長から上の層）が個々の教官の採点簿に目を光らす時機である。

ここで重要なのは、学生の採点は教室における授業に対する採点であり、それを教官の全活動の中で正しく位

置づけをすることだと思う。例えばある教官がある学期にただ一コマ（1週間に3～4時間の講義）の授業しかしなかったとしよう。これが大気科学教室では標準的な授業負担量である。学生の採点を大学当局が重視しているからといって、それだけに全力をあげたらどうだろう。

大気科学教室では、理・工学部の他の教室にならい、1コマの授業は1週間40時間の勤務時間の1/3に相当すると規定している（全く新しいコースを教える時には、この割合は大きくなる）。残りの2/3は教室外の授業（院生の論文指導など）、研究、学内外へのサービス（委員会や審議会、学会誌論文やNSFへの研究費申請書のレビューなど）にあてることになる。院生の指導は重要な項目であり、上記の昇進推薦の資料には、これまで何人の修士・博士を指導卒業させたか、彼らが現在どんな職・地位についているかまで記入する。院生1人当りの指導は、院生の進歩段階によって違うが、勤務時間の8～12%に相当するとする。

なんだかずい分機械的なようであるが、こうして数字で示さないと、前記のように1コマの授業に全力をあげるのには、教室の方針に沿わないことを示し、また研究オンリーの研究所員と研究の生産性を比較する根拠がない。研究の質と量については別途に記述する。とにかくこうした結果、私が推薦した昇進は例外なしに大学当局で承認されており、私の知る限り、学生による採点が大学当局による不当な管理に利用されたという証拠はなかった。

第24回「夏季大学テキスト」販売について

去る7月24日～27日、気象庁講堂において行われました夏季大学のテキストを希望者におわけいたします。

記

テキスト名：第24回夏季大学「海と大気」

販売価格：1部1,500円

申し込み方法：代金を添えて必要部数を申し込んで下さい。（郵便振替 東京 3-5958）

申し込み先：〒100 東京都千代田区大手町気象庁内
日本気象学会
Tel. (03) 212-8341 (代)